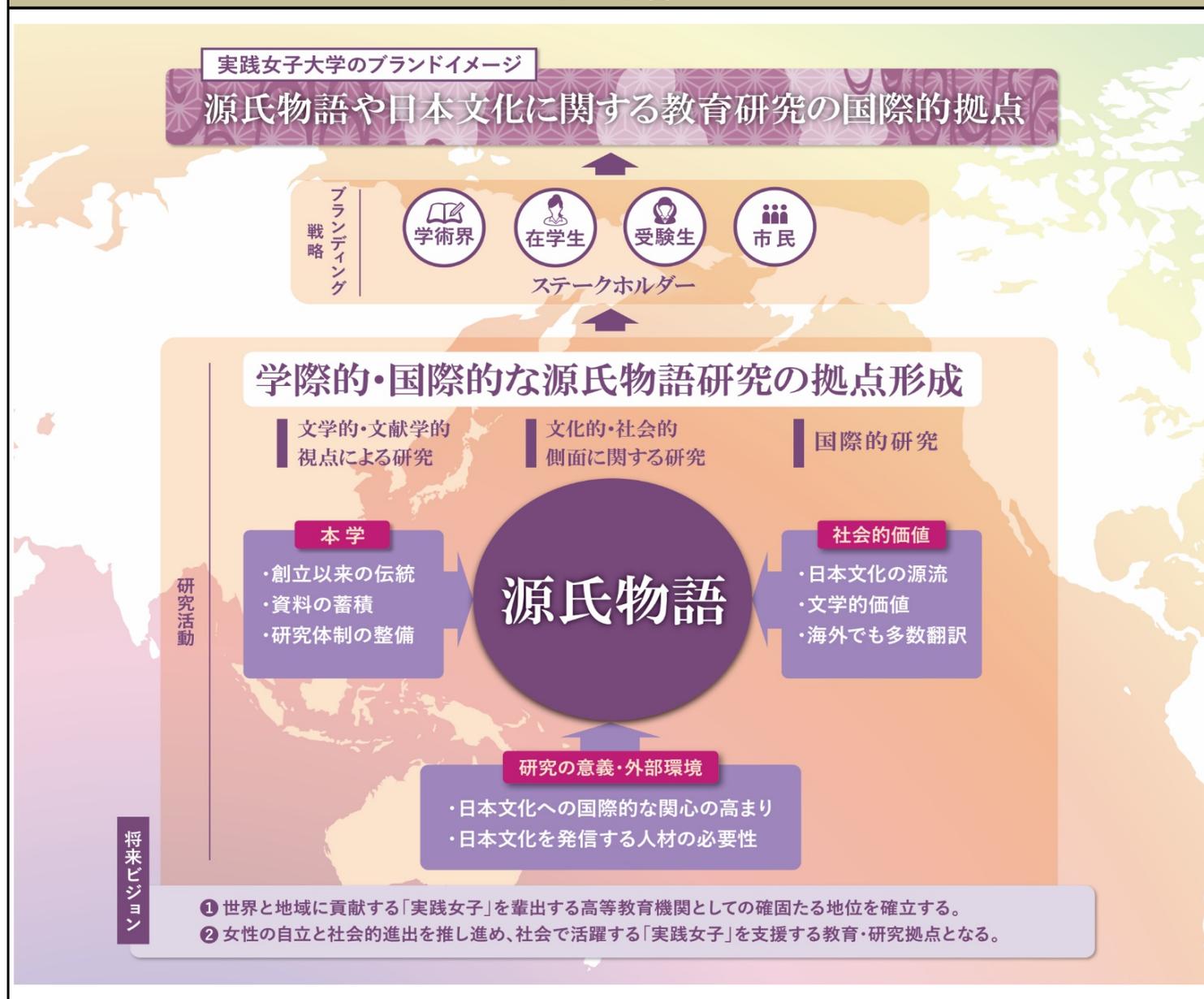


平成30年度私立大学研究ブランディング事業計画書

1. 概要（1ページ以内）

学校法人番号	131023	学校法人名	実践女子学園		
大学名	実践女子大学				
主たる所在地	東京都渋谷区、東京都日野市				
事業名	源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	3728人
参画組織	文芸資料研究所、文学部、生活科学部				
審査希望分野	人文・社会系	○	理工・情報系		生物・医歯系
事業概要	源氏物語研究の伝統を有する本学が国際的な拠点を形成し、文理融合による独自の学際的手法によって研究を実施する。本事業により源氏物語研究の新たな展開と、日本文化の理解促進という成果が得られる。グローバル化する社会で日本文化の更なる発信が課題とされる中、本事業の成果の活用によって源氏物語を源流とする日本文化の深い教養と発信力を備えた人材を輩出し、世界と地域に貢献する教育研究機関としての地位を確立する。				

イメージ図



2. 事業内容（2ページ以内）

（1）事業目的

源氏物語は、世界最古の女流文学・長編小説のひとつであり、日本の文学・文化・社会に大きな影響を与え続けている。海外でも多くの翻訳が流通する中で、国際的にも高い評価を受けており、近年の日本文化に対する関心の高まりの中、更なる注目を集めている。本事業は、源氏物語研究について創立以来の伝統と蓄積を有する本学において、国内外の研究機関・研究者との連携のもとで学際的・国際的な研究の実施と拠点形成を行い、その成果発信をもとに本学のブランディングを行うものである。

【外部環境、社会情勢と研究テーマとの関連】

近年、日本文化への国際的な関心が高まっており、日本政府観光局の統計によれば2016年までの10年間で訪日外国人は約1670万人増加し、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催も控え、今後もその数は増加し続けることが予想される。また、インターネットの発展によりSNS等が普及し、個人が国境を越えて情報収集・発信を行うことも容易になっている。このように海外とのコミュニケーションの機会が増加する等、グローバル化が進む社会情勢において、日本文化について日本人自身がその価値を十分に認識した上で、国内外へのより積極的な発信を行う必要性が唱えられている（「平成26年度 文部科学白書」等）。

源氏物語は最古の女流文学・長編小説のひとつであり、日本の古典文学作品の最高峰とされ、現在に至るまで詩歌、随筆、戯曲をはじめとした日本文学の様々な分野に対して影響を与え続けている。それだけではなく、源氏物語をモチーフとした絵画、服飾、工芸品等も数多く製作されており、源氏物語は日本文化の源流をなすものとしても位置づけることができる。上述のように日本文化発信の必要性がある中、日本文化の象徴ともいえる源氏物語の研究を行うことは大きな意義を有する。そして、源氏物語研究を深めるためには、文学的視点だけではなく、文化・社会的側面等、様々な側面を考慮した学際的な研究拠点の形成が求められる。

さらに源氏物語は、国際的にも高い評価を受けている。現在は33の言語に翻訳され、流通するとともに、2008年の源氏物語千年紀で国際的な興味関心を広く集めたことを受け、海外でも源氏物語研究が盛んになりつつある。こうした環境において、様々な国の研究機関・研究者との連携のもとで国際的な研究拠点を形成し、継続的に事業を実施することは、源氏物語研究の高度化にもつながるものである。

【本学に係る現状と研究テーマとの関連】

本学は、1899年の学園創立以来、源氏物語研究に取り組んできた。文学的研究においては、本学の創立者である下田歌子はその講義で評価を得たほか、戦後も山岸徳平、阿部秋生、野村精一らが多くの研究成果を発表し、学術界をリードしてきた。さらに、本学は源氏物語に関する資料を豊富に所蔵しており、中でも黒川文庫、山岸徳平文庫、常磐松文庫等は世評の高い特色あるコレクションである。加えて、将来を見据え、これまで文献研究の中心であった室町期の資料だけでなく、鎌倉期の資料も他の研究機関に先駆けて収集しており、源氏物語関連の古写本や古筆切等の所蔵数は世界でもトップクラスである。

これらの研究蓄積と豊富な資料を基盤として、近年、本学は全学的に推進すべき事業として源氏物語研究を位置付け、推進している。同時に、国内外の研究機関・研究者との連携のもと、附置研究所である文芸資料研究所を中心とした研究拠点形成に取り組んでいる。特に有職故実、装束、礼法、民俗芸能、美術等の様々な分野の専門家を研究員とすることで、源氏物語が日本文化に与えた多様な影響を分析し、源氏物語に描かれた時代・社会に関する知見を得るための体制を整えている。これら文化的・社会的側面に関する源氏物語研究の成果を蓄積するとともに、「異文明との対話の新世紀 実践『源氏物語』研究フォーラム」（2001年）、「源氏物語千年紀記念講演会」（2008年）、「宮廷の華 源氏物語」（2014年）、「公開講座 源氏物語のたのしみかた」（2017年）といった本学主催の講演会等を通じ、社会に対して積極的に発信している。

【源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成を本事業のテーマとして選択した理由】

本学は創立以来約120年にわたり源氏物語研究に取り組み、研究成果の蓄積と社会への発信を行ってきた伝統に加え、文芸資料研究所を中心とした全学的な研究体制や学外とのネットワークを構築し、学際的・国際的な研究体制の整備も進めている。また、教育機関としても源氏物語に関連する共通教育科目・専門科目も多数開講されており、教育面における本学の特色となっている。グローバル化する社会情勢において、日本文化を深く理解し、わかりやすく説明できる人材を育成することが求められる中、源氏物語に関する研究成果を通じて、日本文化の特徴を理解する人材の育成により、本事業はそのニーズに応えることとなる。

以上のように、源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成を本学が実施する理由は十分であり、本事業のテーマとして選択した。

【大学の将来ビジョン】

本学は、2014年に教職協働の全学的組織として設置した教学グランドデザイン策定会議において、以下の建学の精神および教育理念について再確認し、改めて学内外への公表を行った。

- ・建学の精神：女性が社会を変える、世界を変える
- ・教育理念：品格高雅にして自立自営しうる女性の育成

これを踏まえ、10年後の大学の将来ビジョンとして以下の2つを策定した。

- ・世界と地域に貢献する『実践女子』を輩出する高等教育機関としての確固たる地位を確立する
- ・女性の自立と社会的進出を推し進め、社会で活躍する『実践女子』を支援する教育・研究拠点となる

これらビジョンに謳われている本学の使命は、その教育研究活動を通じ、グローバル化の進展する社会において自立し活躍しうる女性を輩出し、支援することである。社会との緊密な連携のもと、柔軟かつ実践的な課題対応能力と、深い教養や品格を身につけ、世界と地域に貢献することができる人材の育成を進めている。

(2) 期待される研究成果

本事業は、源氏物語の学際的かつ国際的な拠点形成を目的としている。そのために、以下4つのテーマを設定し、事業を展開する。

① 文学的・文献学的視点による源氏物語研究：古筆切の活用と科学的手法に裏打ちされた本文の探究

本テーマでは、源氏物語の本文（原典のテキスト）の探究と考証を、以下に述べる2つの手法を組み合わせ、文学・文献学領域における新たな学術的知見を得る。

まず、1つ目は鎌倉期以前の古筆切を活用した調査研究である。本文の探究はあらゆる古典研究の基盤となる重要な研究領域であり、現在も様々な議論と検証が重ねられている。従来、本文の探究は主に室町期以降の古写本を中心に行われてきた。その要因は、鎌倉期以前に作成された源氏物語の写本の多くが冊子や巻物としての形態を保っておらず、切断されて断片化し、古筆切として散逸しているため、研究資料としての活用が困難であったことが挙げられる。しかし本学は、これまでの積極的な資料収集と調査研究の蓄積により、古筆切を用いた研究手法を確立しており、2014年には古筆切の調査研究によって平安期の物語である「夜の寝覚」の欠落した本文の復元に貢献する等の実績も有する。本事業においても、本学で保有する世界有数の古筆切資料群を中心に、連携研究機関に所蔵されている資料や新たに収集する資料を加え、鎌倉期以前の源氏物語本文に関する調査研究を実施することにより、文学的・文献学的な新たな知見を獲得する。

2つ目は、紙質測定や光学分野の技術を応用することで、非破壊の手法で古筆切の年代や作者等の科学的な同定を行う。これまで古筆切の作成された年代等の調査は、筆跡や描かれたテキスト、資料の流通過程等を総合的に検討することで行われてきたが、科学的裏付けや客観性が十分でない事例も存在していた。そこで、本テーマにおいては紙の繊維を3Dレーザ顕微鏡によって観察・分析したり、表装された資料の裏面に描かれたテキストを高精細の光学機器で読み取り、客観性のある科学的裏付けの下で各資料が作成された時代等の同定をより正確に行う。本学には紙質研究の専門家が所属しており、3Dレーザ顕微鏡による測定環境も整っているほか、連携研究機関である国文学研究資料館や奈良先端科学技術大学院大学の協力を仰ぐことで光学分野を応用した調査も可能となる。

これらの最先端の科学技術を活用した資料研究の実績を重ね、古筆切を用いた研究手法と組み合わせた調査手法を確立することは、新規性があり、かつ独自性の高いものであり、学术界への寄与のみならず社会・産業面への波及効果も期待できる。

② 源氏物語の文化的・社会的側面に関する研究：源氏物語および日本文化の可視化・具現化

源氏物語は文化的な地位も有し、日本社会の服飾、食文化、工芸品、伝統文化など、現在に至るまで様々な側面に影響を及ぼしている。例えば源氏絵や、源氏物語を題材とした様式・意匠の類は、服飾や調度品のデザインとして応用されているほか、食文化史の観点から、源氏物語を意匠とした和菓子の存在等も注目されている。源氏物語が描かれた当時の文化について理解するとともに、室町期以降、これらが社会でどのように享受・受容されたのかを明らかにすることで、源氏物語を源流とする日本文化の特徴を描き出すことが可能となる。加えて、こうした文化的・社会的視点は、源氏物語が描かれた舞台、日本文化を感覚的に捉えることを可能とし、イメージによる源氏物語の理解の促進につながる。

本テーマでは、i 服飾・有職故実から見た源氏物語（服飾・儀礼文化的研究）、ii 「食」の視点から見た源氏物語（食文化史的研究）、iii 子ども（遊び）の文化に関する研究、iv 日本古来の伝統文化に関する研究、という項目で研究を行う。

本学ではこれまでも、源氏物語の図様、源氏絵、装束の文様と画題、平安期の食文化（食材と調理）、また礼法等の伝統文化など、文化的・社会的側面からの研究を蓄積してきた。例えば、源氏物語に記された食の視覚化や、当時から現在に至る食の変遷と伝統の解説により、国内外に対する日本文化の理解促進と発信に寄与した実績がある。本テーマではこれをi～ivの項目で展開し、得られた幅広い知見を集約・統合することにより、源氏物語研究の可視化・具現化を行い、体感的に源氏物語を発信するという本学独自の取り組みとして国際的に発信する。

③ 海外研究者との連携による国際的研究：世界文学としての源氏物語の評価と研究の高度化

源氏物語は、最古の女流文学・長編小説のひとつとして、また心理描写の優れた小説として、世界的に高い評価を受けている。現在は多数の外国語訳が発表され、海外でも源氏物語研究が盛んに行われつつある。例えばフランスにおいては、以前から平安期の文化に関する興味関心が強く抱かれており、日本と同様に王朝文化と女流文学の歴史を有することもあって、近年は様々な比較文学的な研究が行われている。また、大英博物館のアーサー・ウェイリーによる古典的な英語訳は、源氏物語の海外での普及に大きな役割を果たしたが、これが逆輸入され、2017年から日本語の現代語訳が発表されている。こうした多様な翻訳の存在は、源氏物語の異文化における解釈と受容、また比較文学的な研究課題を提起している。

本テーマにおいては、比較文学的な視座に立ち、海外4カ国（フランス、イギリス、韓国、マレーシア）の研究機関・研究者との連携のもと、研究を行う。これにより、源氏物語の世界文学としての評価と普及を進めると共に、異文化の視点を加えることで源氏物語研究に新たな解釈・分析をもたらす。

④ 学際的・国際的な源氏物語研究の拠点形成：研究の高度化と成果の発信

①～③の成果をもって源氏物語研究の高度化をはかるためには、様々な専門分野や国籍の研究者が学術交流を行い、成果発信を継続する環境が必要である。そこで、本学に学際的・国際的な源氏物語の研究拠点を形成することにより、研究の高度化を実現する。本事業で得られた研究成果は、データベース化し、オープンデータとして世界中の研究者が活用できる仕組みを整える。これにより、源氏物語研究の活性化に寄与するとともに、本学を拠点とした源氏物語研究の更なるネットワーク化が実現する。以上を継続的に実施し、源氏物語や日本文化への関心・理解がいつそう高まることは、文化的、社会的、国際的にも大きな価値を有する。

3. ブランディング戦略（5ページ以内）

① 大学の将来ビジョンの設定と本事業で打ち出す独自色

【本学の将来ビジョン】

本学は、創立120周年を目前にした2014年に「女性が社会を変える、世界を変える」という建学の精神を再確認した上で、建学の精神に基づく次の2つの将来ビジョンを策定した。

「世界と地域に貢献する『実践女子』を輩出する高等教育機関としての確固たる地位を確立する」
「女性の自立と社会的進出を推し進め、社会で活躍する『実践女子』を支援する教育・研究拠点となる」

これらは、本学の全学的組織として設置した教学グランドデザイン策定会議において、教職協働で検討を行った結果を受けて、常任理事会において審議・決定したものであり、教授会をはじめとする各種会議体、学内報、グループウェア、WEBサイト等を通じて学内外に周知されている。将来ビジョンに基づき、本学は女子高等教育機関として「グローバル化・多様化する社会に対応しうる、知性と徳性を備えた実践力ある女性の育成と支援」に取り組むこととしている。

【本事業で打ち出す独自色】

本学は、創立以来約120年にわたり源氏物語に関する教育研究を積み重ねてきた。創立者である下田歌子をはじめ多くの研究者が教育研究に携わってきた伝統を有し、源氏物語に関する資料の所蔵数も世界トップクラスである。近年は人文科学だけでなく、生活科学、自然科学領域の研究者も加わり、学際的に研究を展開している。また、海外の大学等との連携も拡充し、国際的な共同研究を進めている。

本事業は、源氏物語研究の国際的かつ学際的な拠点を整備し、研究の先端化・高度化を進めることにより学術の発展に寄与するとともに、源氏物語および日本文化の国際的な発信と理解の促進を行うことを目的とする。例えば、古典籍の資料研究への3Dレーザ顕微鏡を用いた紙質測定や光学分野の応用による科学的手法の導入は、日本の科学技術を人文科学に活用することで新たな知見を得る、貴重な取り組みである。これは、源氏物語研究に関する伝統と豊富な資料の蓄積をもとに、学際的な研究体制を構築することによりはじめて可能となる、本学ならではの独自色ある取組みである。また、源氏物語の本文に関する研究と、文化的・社会的側面に関する研究の統合により、源氏物語および日本文化の理解促進に寄与する点も、これらの研究を両立し成果を蓄積してきた本学ならではの独自色である。

これら本学の伝統と独自色は、これまでも学園として源氏千年紀の記念事業等を実施する中で、折にふれて学内外に示されてきた。また、本事業の申請にあたって常任理事会等の諸会議での承認を受け、広く学内に周知されている。

【本事業で打ち出す独自色と将来ビジョンとの関連】

これら独自色のもとで実施する本事業は、本学の理念および将来ビジョンに示された「グローバル化・多様化する社会に対応しうる、知性と徳性を備えた実践力ある女性の育成と支援」という方向性に合致している。グローバル化が進む社会においては、源氏物語に代表される日本の文化を深く理解し、自ら発信することができる人材の育成と支援が急務である。本事業の、源氏物語および日本文化の教育研究拠点形成と理解促進という成果は、こうした人材の育成と支援に寄与し、本学の理念および将来ビジョンの実現を進めるものである。

② ブランディング戦略の対象（ステークホルダー）

本事業の対象を以下のとおり検討した結果、1)研究者等学術界、2)在学生、3)受験生およびその保護者、4)社会全般・市民という4者をステークホルダーとして抽出した。

まず、本事業は源氏物語研究の学際的・国際的な拠点形成を目指すものであり、その研究を高度化することで、新たな価値や知見を得ることを目的としている。これにより、学術研究の発展に寄与することから、国内外の研究機関や大学、研究者など学術界をステークホルダーとした。

次に、本事業による源氏物語研究の成果を教育へと展開することにより、本学の将来ビジョン実現につながる、特色ある教育の実現がもたらされる。グローバル化の時代に必要な、源氏物語をはじめとする日本文化に関する知識・教養の習得は、教育の特色化や質的向上につながることから、本事業のステークホルダーとして本学在学生を設定した。

また、本事業の実施により、本学は日本の伝統的な文化に関する教育研究に取り組む大学としてのイメージを獲得することが期待される。後述の調査によれば、受験生の多くは本学に対して「伝統と実績がある」という漠然としたイメージを有している。本事業はこうしたイメージを具体化することとなり、「伝統と実績」を本学の独自性・強みとして志願者獲得に寄与することが想定されることから、受験生およびその保護者をステークホルダーとして設定した。

最後に、日本文化の源流である源氏物語は、国内外から多くの興味関心を集める対象である。本事業の活動内容や成果を社会全般に対して広く発信することにより、源氏物語・日本文化に対する理解を促進するとともに、本学に対するイメージの広範囲での共有と、ブランディング活動全般の基礎となる効果が見込まれることから、社会全般・市民をステークホルダーとして設定した。

③ 事業を通じて浸透させたいイメージ

本事業は、本学が「源氏物語や日本文化に関する教育研究の世界的な拠点」としてのイメージを獲得し、ブランディングにつなげることを目的としている。そのため、先述した1)～4)のステークホルダーそれぞれに対して効果的と考えるイメージを以下のとおり設定し、事業の実施を通じて浸透を図る。

○学术界へ浸透させるイメージ：「学際的・国際的な源氏物語研究の世界的な拠点」

国内外の様々な専門分野の研究者との連携のもとで源氏物語の研究を行い、優れた成果を発信し続けることが、学术界における本学の評価向上につながる。こうした研究活動の着実な実施と併せて、世界的な研究拠点としてのイメージを発信することにより、本学の学术界におけるブランディングを図る。

○在学生、受験生および保護者へ浸透させるイメージ：「源氏物語研究を基礎として、日本文化に関する深い教養と発信力を修得できる大学」

在学生、受験生および保護者は、本学がどのような特色ある教育を展開し、それによってどのような能力を身につけることができるのかという点に興味関心を有する。これに端的に答えるため、源氏物語を通じた日本文化の体系的な教育に取り組む大学としてのイメージを発信する。

○社会全般・市民へ浸透させるイメージ：「源氏物語といえば実践女子大学」

本学が広く一般的に持たれているパブリックイメージは、ブランディング活動を進めるにあたり、先入観や事前情報として様々な側面で影響を与える。こうしたイメージは、学术界や在学生、受験生といったステークホルダーが有する具体的なイメージとは異なり、印象的な内容で共有されることが多い。そこで、源氏物語に取り組む教育研究機関として、本学と源氏物語との強い関係をシンプルに印象付けるイメージの発信が効果的であると判断した。

④ 本学のイメージおよび認知度に係る把握と分析

本事業の具体的なブランディング戦略を策定するにあたり、現在の本学に関するイメージおよび認知度に関して以下のとおり把握と分析を行った。

【学术界における本学のイメージ】

まず、本事業の学術的成果を波及させる対象として、日本の古典籍に関する中核的・先進的な研究機関である、国文学研究資料館の山本和明特任教授から、学术界における本学のイメージについてヒアリングを行った。その結果、本学が所蔵する古典籍関連資料は質・量ともに世界有数であること、また日本文学領域における研究の実績も豊富であり、先鋭的な源氏物語研究の伝統を有するとの認識が確認された。一方で、科学的手法を導入した文献調査や、鎌倉期以前の古筆切の活用、また源氏物語の文化的・社会的側面に関する研究など、本学における研究活動の先進性・独自性については、更なるイメージの浸透を図る余地があるとの見解が示された。

以上をもとに、本学はブランディングの観点から、本事業の実施と平行してその意義や先進性を積極的に発信する必要があるとの分析に至った。

【在学生の本学に対するイメージ】

2015年度に実施した在学生調査によれば、本学の教育理念に対する理解は、「とても理解している」「やや理解している」の回答割合が約72%となっており、在学生に対する教育理念やビジョンの周知・浸透は進んでいると考えられる。一方で、4年生からの回答では「幅広い教養を身につけたかった」が24.1%、「高度な専門知識を身につけたかった」が25.9%と、学びに対する更なる需要が示されている。併せて、卒業時に毎年実施されているアンケートの自由記述欄の調査・把握も行った結果、特色ある教育の展開を進めるとともに、その意義を明確に伝える必要があるとの分析に至った。

【受験生の本学に対するイメージ】

受験生に対するイメージ調査では、株式会社リクルートマーケティングパートナーズが関東エリアの高校3年生を対象に行った「2017年度 進学ブランド力調査」の分析を行った。本学は高校3年生における知名度が54.7%と女子大学の中では比較的高い一方で、興味度や志願度は知名度が同程度の大学に比べて低いことがわかった。また、高校生が本学に興味を持った理由は、「教育方針・カリキュラムが魅力的であること」が10.5%（平均29.5%）、「教養が身につく」が10.5%（平均15.8%）であり、知名度は高いが、教育や研究に対する具体的なイメージが受験生に伝わっていない現状が読み取れた。また、「伝統や実績がある」という回答は42.1%であり、私大平均の46.3%には至らないものの、多くの受験生が本学への興味の理由として、伝統を挙げており、教育内容や特色の具体的な広報が必要であると分析した。

【本学の一般的イメージ】

本学の一般的な認知度およびイメージについては、日経BPコンサルティング株式会社が有識者（ビジネスパーソン）・中学生以上の子を持つ父母・教育関連従事者などを対象に行っている「大学ブランド・イメージ調査2017-2018（首都圏版）」の分析を行った。それによると、首都圏（東京・千葉・埼玉・神奈川）における本学の認知率は79.6%と全体平均（67.6%）を上回る。しかし、その認知度の内訳を見ると「名前だけは聞きしただけ」という回答が60%を超えており、さらに項目ごとに細かく見ると、「他にはない魅力」という回答は有識者では1.2%（私大平均2.4%）であり、本学の教育・研究内容に関する一般的な認知度は低いという現状である。一方、「伝統や歴史を重んじている」という項目は5.4%で私大平均の4.7%よりも高く、社会的には伝統のある大学というイメージを持たれている。また、これまで本学が源氏物語を題材にしたシンポジウム・公開講座等を開催した際に実施した参加者アンケートからは、源氏物語をはじめとする日本文学研究が本学の特色・強みとして認識されていることが分析できた。

以上の分析から、本学は社会的に一定の知名度を有し、かつ歴史と伝統を有する大学としてのイメージを持たれている一方で、本学の具体的な教育・研究内容や特色・独自性については、受験生・在学生においても、一般社会においても十分に認識されていないことがわかった。また、学术界においても、研究内容の独自性や先進性が十分に浸透していないという課題が明らかとなった。そこで、本学のブランディング戦略を効果的に進めるためには、本学の特色・強みである源氏物語に関連した教育研究の内容や実績を、本事業を通じて浸透させたいイメージと併せてステークホルダーに対して積極的に発信し、独自性をアピールしていくことが重要であるとの結論に至った。

⑤ 本事業の対象（ステークホルダー）に応じたブランディング戦略

本事業に関するブランディング戦略は、全ての対象（ステークホルダー）に共通して行う内容と、対象を絞って実施する内容とに大別される。さらに後者については、対象に応じて内容を精査し、個別に戦略を策定する。具体的には、研究者等の学术界に対しては専門的な内容の情報発信・ブランディングを行い、在学生、受験生、社会全般となるにつれて一般的な内容を強めていく戦略が必要となる。

1) 全ての対象に共通する戦略と工程

全ての対象に共通するブランディング戦略については、事業の全体像と目的、成果、進捗状況等が正確かつ迅速に伝わること、また幅広い訴求力を有する内容とすることを狙いとして、以下の工程で実施する。

【情報発信手段・内容】

ア. 大学Webサイト内における特設ページの開設

本事業に関する情報を集約して発信するため、大学Webサイト内に本事業の特設ページを開設し、事業内容やその成果などを随時掲載する。特設ページの開設に向けては、2018年度にコンテンツ作成に着手し、同年度内に公開する。なお、国内に限らず海外への発信も行うため、英語版の特設ページも2019年度に作成・公開する。

同時に、本事業に係るイベントの告知や実施状況など、即時性が重視される情報は、Twitter、Instagram等のSNSを活用した発信を行う。2018年度の特設ページの開設と同時にSNSの運用を開始する。

イ. 事業紹介パンフレット

本事業のパンフレットを、2018年度（導入）、2020年度（中間報告）、2022年度（成果報告）に制作し、各方面に配布する。内容はそれぞれ本事業の目的や全体像、進捗状況、最終的な成果と今後の展望がわかりやすく伝わるものとする。また、パンフレットの内容は特設ページにも掲載し、Web上でいつでも閲覧できるようにする。

ウ. 本学の創立120周年と連動したキックオフシンポジウム

本事業の趣旨と全体像を広く発信し社会的認知を得るため、本学が創立120周年を迎える2019年の前半にキックオフシンポジウムを開催し、本学の伝統を生かした特色ある取組みとして位置づける。

エ. 東京オリンピック・パラリンピックとの連携イベント

本学は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会大学連携協定を締結しており、これまでも大学連携地域巡回フォーラムへの参加や、本学の学生による「女子大生フォーラム」等の企画開催、また海外からの訪日客への対応に関する検討など、活動の実績を重ねている。東京オリンピック・パラリンピックは、日本文化の国際的な発信にあたって貴重な機会となることから、これらの活動と連携したイベントを開催し、本事業の紹介と成果の発信を行う。

オ. 学内の博物館相当施設での関連展示

本学の博物館相当施設である香雪記念資料館において、本事業に関連する展示を行う。本事業の特色である源氏物語の文化的・社会的側面に関する研究の成果は、源氏物語の特徴を目に見えるわかりやすい形で提示し、日本文化の理解促進に寄与するため、その視覚的な発信を目的とした展示を実施する。

【成果指標と達成目標、進捗状況の把握方法】

成果指標は、特設ページへのアクセス数および各種メディアにおける掲載件数とする。

特設ページへのアクセス数は、広報担当部署である企画広報部が毎月アクセス解析レビューを行い、コンテンツやページ構成の見直しを随時行う。特設ページのアクセス数を前年比1.2倍とすることを各年度における達成目標とする。

また、各種メディアにおける掲載件数については、国内のみならず、海外での件数も含めて指標とする。イベントや成果発表のタイミングでマスコミ関係者への働きかけ、プレスリリースも積極的に行い、研究活動の実施とブランディング戦略を一体のものとして進める。本事業に関するメディア掲載の件数が、国内外合わせて継続的に年間10件以上となることを達成目標とする。

2) 学术界および国内外の研究関連機関に対する戦略と工程

学术界に対するブランディング戦略においては、本学の学際的・国際的な研究拠点としての役割、位置付けを明確化した上で、研究成果の発信や学术交流の活性化等を通じてその評価を高め、本学の世界的な研究拠点としてのイメージを浸透させることが重要となる。そこで、以下の工程で情報発信・成果把握等を行う。

【情報発信手段・内容】**ア. 研究拠点としての位置付けの明確化**

本学が実施してきた、源氏物語に関する研究実績・成果を集約するとともに、本学の所蔵する貴重な資料群についても整理・目録化を進める。併せて、本学の学際的・国際的な研究体制、研究ネットワークの再確認を行う。こうして源氏物語に関する研究拠点としての本学の位置付けを明確化した上で、大学Webサイトの特設ページを用いて情報を発信し、学术界での認識向上をはかる。

イ. 学会発表、学術誌への論文投稿、書籍の刊行

研究成果を学术界に発信するため、学会における研究発表と学会誌への論文投稿を積極的に行う。また、最終年度には本事業の成果をまとめた書籍を刊行し、多様な視点による源氏物語研究の基本書となることを目指す。

ウ. 国際学術シンポジウム

国内外に対する研究成果の発信と、学术交流の活性化を行うため、国際学術シンポジウムを開催する。時期と回数は、2020年度の中間報告、2022年度の最終成果報告の2回開催を予定している。2020年度のシンポジウムでは、本事業に期待する内容と、本学に対するイメージについて各分野の研究者から意見聴取をおこない、その結果を以降の計画に反映させる。また、絵入本学会と連携したワークショップを2018年に韓国で、2020年、2022年も開催し、海外の研究者を交えた学术交流を図る。

エ. 成果のオープンデータ化による発信

本学と連携関係にある国文学研究資料館との協同により、研究成果のオープンデータ化による国際的な発信を行う。本学に所蔵する貴重な資料群について、本事業での調査研究により得られた文学的・文献学的知見をもとに整理し、同資料館の日本古典籍総合データベース事業との関連のもと、オープンデータとして公開を行う。また、科学的手法による古典籍資料の測定結果についてもデータベース化し公開することで学术界を中心とした利活用を促進する。

【成果指標および達成目標、成果把握方法】

成果指標は、学会での発表数、学術誌への論文投稿数および国際学術シンポジウムの参加者数とする。

学会での発表数は、本事業の成果に関する件数が毎年3件以上となることを目標とする。

学術誌への論文投稿数は、事業2年目以降、毎年5件以上となることを目指す。

シンポジウムの参加者数については、各回200名以上を目標とする。

3) 在学生に対する戦略と工程

在学生に対するブランディング戦略では、本学の特色ある教育研究の意義・内容を伝える機会を設けるとともに、本事業と連動した正課内外の教育を通じて、源氏物語・日本文化に関する深い教養と発進力の習得を進める。在学生自身が、これら能力を身に着けた人材としての成長を実感することが、ブランディングのイメージ浸透において不可欠である。

【情報発信手段・内容】**ア. 学内での紹介・展示**

在学生対象のオリエンテーション等で本事業の意義・内容を伝え、認知を広める。また、在学生が集まるスペースにおいて、年に2～3回程度、本事業に関するパネル展示を行う。本事業と関連した「実践女子大学と源氏物語」、「海外における源氏物語研究」等のテーマを想定している。

イ. 在学生、卒業生向けイベントでの事業紹介

周年事業、学園祭、ホームカミングデー、各学部が開催する個別イベント等の機会を捉え、本事業の紹介を行うことで認知度を高める。特に、2019年に実施する創立120周年記念イベントにおいて本事業の紹介を行うことで、源氏物語研究が本学の創立以来の伝統・特色であることを改めて在学生に周知する。

ウ. 教育内容への反映

本学は既に源氏物語に関連する共通教育科目・専門科目を多数開講しているが、これらを本事業と連動した内容とすることで教育内容の更なる特色化を図る。例えば、装束、茶道、香道等の専門家からの協力を得て、源氏物語・日本文化に関する体験型学習などを導入する。また、カリキュラム改革において源氏物語に関連する科目の更なる充実を図るほか、英語による源氏物語講座を実施するなどの新たな取組みも進める。併せて、正課外教育の一環として、本事業の様々な活動に学生を参加させることにより、興味関心の喚起と主体性に基づく教養の習得を進める。これらを総合的に行うことで、源氏物語を頂点とする日本文化の体系的な理解を進める。

【成果指標および達成目標、成果把握方法】

成果指標は、在学生および卒業年次生を対象としたアンケート調査の回答とする。「日本文化に関する知識・教養を身につけられてよかった」「源氏物語への興味関心が湧いた」といった記述回答が得られることを目指す。

また、毎年調査する卒業年次アンケートの回答状況を調査し、その結果をもとに戦略の見直しを行う。

4) 受験生およびその保護者に対する戦略と工程

受験生およびその保護者に対するブランディング戦略では、まず難解だと思われがちな源氏物語や日本文化に対するイメージを親しみやすいものとして伝えること、また源氏物語や日本文化に関連する教育の社会的意義について理解を得る必要がある。併せて、源氏物語や日本文化に関する教育研究に取り組む大学としてのイメージや、本学の特色ある教育内容を浸透させることを重視する。

【情報発信手段・内容】

ア. 受験生向けWebページの活用

本学Webサイト内の受験生向けページにおいて、本事業に関するイベントの紹介を行うとともに、特設ページへのリンク・誘導を行う。これにより、源氏物語研究に取り組む大学としての認識を得る。

イ. 受験生向け大学案内への情報掲載

大学案内「CAMPUS GUIDE BOOK」において、本事業についての紹介を行う。2019年度に発行する大学案内から掲載を開始し、創業者紹介のページと続けて掲載する等、源氏物語研究が本学の伝統・特色であることが伝わるようなページ構成に工夫する。また、受験生にとって親しみやすい内容とするため、画像やイラストの掲載を増やす等の配慮を行う。

同時に、本学の教育内容を伝えるページにおいては、日本文化に関する教育の重要性が十分に伝わるよう留意する。

ウ. オープンキャンパスでの本事業の紹介

オープンキャンパスにおいて、本事業に関する講演会やパネルでの展示、ブースでの説明等を実施し、本事業を受験生に対して積極的に紹介する。また、源氏物語が現代の文化や社会に与えている影響をわかりやすく伝える展示等を行うことで、源氏物語に対するイメージを身近な親しみやすいものとする。本事業の後半では、源氏物語に関連する装束、調度品、食文化への影響などが視覚的にわかるような展示も行い、視覚的・体感的に本事業を体験できるような工夫を行う。

【成果指標および達成目標、成果把握方法】

成果指標は、株式会社リクルートマーケティングパートナーズによる「進学ブランド力調査」の回答とする。本学に興味を持った理由について「教育方針・カリキュラムが魅力的であること」という項目が2017年度は10.5%であったところ、最終年度には15%以上となることを達成目標とする。また、「教養が身につく」の項目については最終年度において20%以上の評価を得ることを目指す。毎年の調査結果をもとに進捗状況を把握し、調査の結果によって事業の紹介方法を見直していく。

また、オープンキャンパス時に実施している来場者アンケート等も成果の把握に活用する。事業開始当初は本事業に関連するイベントや展示等の参加者数を増やすことを目標とし、一定の参加者数が得られるようになった後は、イベントや展示の満足度を成果指標に加える。

5) 社会全般・市民に対する戦略と工程

社会全般および市民に対しては、源氏物語に関する一般的な講演会やイベント等を通じて、本事業についての周知を行うことにより、本学が源氏物語に関する教育研究に取り組む大学であるとのイメージを浸透させる。

【情報発信手段・内容】

ア. 生涯学習講座の開講

本事業と連動した、源氏物語に関する生涯学習講座を重点的に開催する。本学ではこれまでも源氏物語に関する生涯学習講座を実施しているが、「読み物」としての源氏物語だけでなく、本学が有する古筆切や装束、調度品等を実際に活用し、源氏物語の世界を体感できる講座も展開する。講座参加者の間口を広げることで、より広範にイメージの浸透を図る。

イ. 公開講座・体験型イベント開催

訪日外国人や、外国人居住者の多い渋谷に立地する大学という特性を生かし、日本文化の海外発信を視野に入れた体験型イベントを、2年目以降、年に1度の頻度で開催する。「読み物」としての源氏物語ではなく、文化的・社会的な側面に関する要素を取り入れ、視覚的・体感的なイベントとする。

また、京都府・京都市等が中心となって推進する「古典の日」と連動したイベントを開催する。源氏物語を日本の貴重な文化資源として活用し、京都の神社仏閣や観光業との連携により、国内外の旅行者等に対して効果的にイメージを浸透させる。

【成果指標と達成目標、進捗状況の把握方法】

成果指標は、生涯学習講座の受講者および公開講座の参加者数とする。生涯学習講座については毎年130名以上の受講者数（2017年比1.2倍）、公開講座においては150名以上の参加者数を達成目標とする。進捗状況の把握は、講座ごとの参加者数を随時確認することにより行う。また、参加者に対するアンケートを実施し、その結果をもとにブランディング戦略を随時検討する。

さらに、日経BPコンサルティング株式会社が行う「大学ブランド・イメージ調査」も成果指標として活用する。現時点では、最終年度に「他にはない魅力」という調査項目について、私大平均である2.4%を超えることを達成目標として設定する。

4. 事業実施体制（2ページ以内）

1. 学内実施体制

学長、副学長、各学部長、学生部長、関連部署長等により構成され、教育研究に関する重要事項を決定する大学協議会において、事業全体の統括を行う。大学協議会の構成員には研究担当理事と広報担当理事が含まれており、学長のリーダーシップのもとで研究活動とブランディング戦略を関連させた計画を策定するとともに、必要に応じて関係部局・部署に協力を依頼し、全学的に事業実施を推進する。

【研究活動の実施体制】

本学では、2014年に学長主導の下で策定した将来ビジョンに基づき、学長方針として「研究活動の更なる推進」を掲げ、全学的な研究活動の活性化に向けた改革を進めている。2015年に全学的な研究支援体制として研究推進室を、2016年には研究活動・研究支援を統括する全学的な組織として研究推進機構（機構長：副学長兼研究担当理事）を設置し、研究マネジメント体制を確立した。

本事業における研究活動は研究推進機構が計画策定を行い、附置研究所である文芸資料研究所を中心に、文学部、生活科学部の研究者が連携した体制のもとで実施する。文芸資料研究所は源氏物語研究の実績を有し、文学分野の研究者だけでなく、紙質研究、装束、礼法、民俗芸能といった様々な分野の専門家が在籍している。また、本学の生活科学部には食文化、調理学、被服、住居学といった分野の研究者が多数所属している。

本事業を学際的に展開するため、研究推進機構としてこれら多様な専門分野の研究者が協同する拠点を形成し、学術交流と相互作用のもとで研究活動を実施する。例えば、紙質測定による古典籍の科学的な年代同定においては、文学・文献学領域の研究者、紙質研究の専門家、及び3Dレーザ顕微鏡を用いた測定に知見を有する研究者が協同して調査を行う。また、源氏物語の文化的・社会的側面に関する研究においても、文芸資料研究所や文学部の研究者と、生活科学部に所属する食関係や被服分野の専門家との連携により、源氏物語および日本文化の可視化、具現化を可能とする。

【ブランディング戦略の実施体制】

本学における広報活動は、統括責任者である広報担当理事と、全学的な広報を担当する企画広報部との連携のもと、推進体制が整備されている。本事業のブランディング戦略についても、企画広報部が中心となって、研究活動を統括する研究推進機構との協力のもと、事業全体の目標を見据えつつ、各年度の研究活動と関連したブランディング戦略を実施する。

2. 自己点検・評価、外部評価体制（PDCAの機能と連携）

【研究活動のPDCAサイクル：研究推進機構会議】

研究活動に関する評価やPDCAは、研究推進機構のもとに組織された意思決定機関である研究推進機構会議（以下「機構会議」と言う。）を中心に行う。機構会議は学長、副学長、学部長、研究所長等で構成され、毎月、全学の研究活動について協議、企画、検証等を行っている。本学の研究プロジェクトは、機構会議に進捗や成果の報告を行うこととなっている。本事業の実施・進捗状況についても、文芸資料研究所および研究推進室が年に2回、機構会議において報告し、協議と評価を行う。その結果を受け、機構会議から文芸資料研究所および研究推進室に対し、指導・助言等が行われる仕組みとする。年度末には、研究推進機構で研究活動に関する実施状況報告書を作成し、大学協議会に提出する。

【ブランディング戦略のPDCAサイクル：広報担当理事定例会】

ブランディング戦略に関する評価やPDCAは、学園全体の広報戦略に関する会議体である広報担当理事定例会（以下「広報定例会」と言う。）を中心に行う。広報定例会には広報担当理事、企画広報部長および広報を担当する企画広報部等の教職員が参加しており、毎月、広報戦略・方針の策定から実務レベルの情報共有まで幅広い内容が取り上げられている。本事業については、広報定例会において研究活動の実施状況や成果を踏まえたブランディングの実施戦略を策定する。また、毎年度、ブランディングの実施状況や達成度について企画広報部が広報定例会に報告し、評価を行う。その結果を受け、広報担当理事から関係部局・部署に対して指導・助言等が行われる。年度末に、企画広報部でブランディング戦略に関する実施状況報告書を作成し、大学協議会に提出する。

【事業全体のPDCAサイクル：大学協議会、自己点検・評価委員会、外部評価助言委員会】

大学協議会は、研究活動とブランディング戦略に関する実施状況報告書の提出を受け、自己点検・評価委員会および外部評価・助言委員会に対して評価の実施を依頼する。

自己点検・評価委員会は、学長が委員長となって、学内の教育研究活動に関する点検・評価を行う組織である。本事業についても、研究活動とブランディング戦略が相互に連携して有効に機能しているか、また実施手法・体制や進捗状況に問題が無いかなどについて実施状況報告書をもとに点検と評価を行い、その結果を大学協議会に報告する。

外部評価・助言委員会は、大学の運営全体を第三者の視点でチェックするための組織であり、学外有識者や本学のステークホルダー等で構成されている。委員会は各年度複数回の実施を計画しており、実施状況報告書をもとに本事業についての評価を実施する予定である。その結果を受け、大学協議会に対して事業実施に関する評価の報告と助言を行う。

大学協議会は、実施状況報告書の内容と、自己点検・評価委員会および外部評価・助言委員会からの報告と助言を検討し、事業全体の評価を行う。その結果を受け、機構会議および広報定例会に対して評価結果を伝えるとともに、必要に応じて改善の指示を行う。これを受け、機構会議および広報定例会は実施計画の見直しを行い、事業内容に反映させるとともに、次年度の実施状況報告でその結果を報告する。

3. 学外との連携体制

(研究機関等)

本事業は様々な研究者の参加のもとで、学際的・国際的な源氏物語研究の展開をはかるため、国内外の研究機関・研究者との協力体制構築が不可欠である。本学は、既に文芸資料研究所を中心に学外との学術連携を進めており、特に国文学研究資料館とは2010年に連携協定を締結し、共同研究等を行っている。古典籍に関する研究成果の世界発信やデータベースの構築等を、国文学研究資料館と協同して進めることにより、成果・情報発信の強化とブランディング戦略を推進する。光学分野の研究を応用した古写本、古筆切の非破壊調査にあたっては、国文学研究資料館との連携協定をもとに奈良先端科学技術大学院大学と協同することで、最先端の技術を活用することが可能となる。

他にも国内では、國學院大學、関西大学、龍谷大学、東洋文庫といった、源氏物語研究の知見と蓄積を有する研究機関との連携体制が整っており、併せてこれら機関の所蔵する資料も活用することによって研究の高度化がはかられる。また、海外の研究機関では、源氏物語研究が盛んなフランスの国立極東学院をはじめ、大英博物館、明知大学校（韓国）、ソウル大学校、ラーマン大学（マレーシア）等との協力体制をすでに構築し、研究員受入と研究プロジェクト実施の実績がある。

また、学会等との連携として、文芸資料研究所が事務局を務める絵入本学会との連携も行っていく。絵入本学会が主催する「絵入本ワークショップ」は、恒常的に源氏物語に関する発表が行われており、上述の連携研究機関の研究者も多く参加し、2018年は韓国日語日文学会との共催で実施する等、国際的なシンポジウムである。

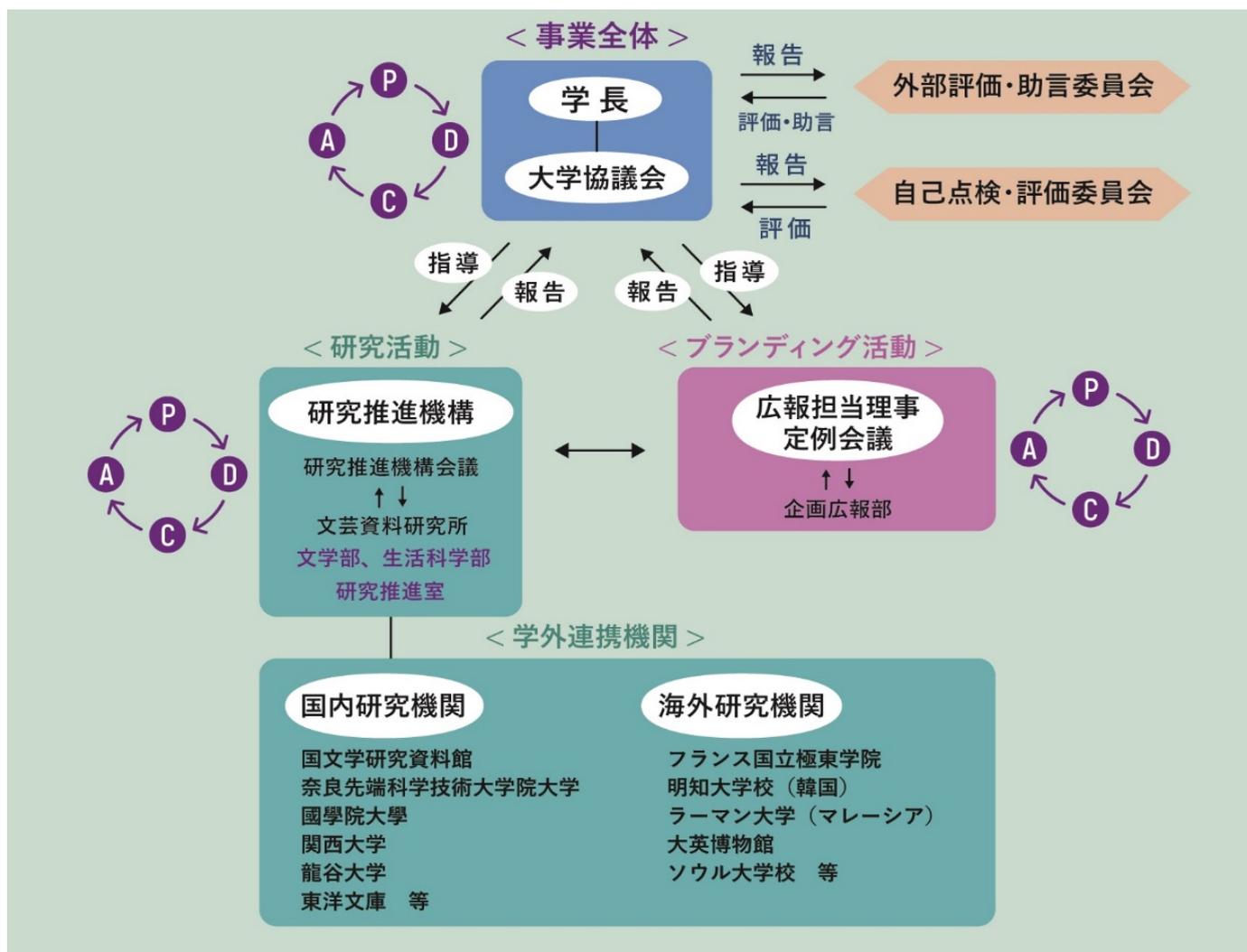
本事業は、こうした学外研究機関との連携をより強化・拡大し、源氏物語研究の拠点形成を進める。

(自治体等)

本事業の成果を広く社会に発信するため、自治体等との連携のもとでシンポジウム等を開催する。本学のキャンパス所在地である渋谷区および日野市とはそれぞれ連携協定を締結しており、教育・文化・学術の振興を協力して進める体勢が構築されている。特に渋谷区は海外からの旅行者・就労者が多く集まることから、渋谷キャンパスでのブランディング戦略の展開は、成果の海外発信に大きく寄与する。

また、「古典の日推進委員会」とも2018年に相互協力協定を締結する予定である。委員の多くが京都府や京都市の関係者であり、源氏物語が書かれた場所であり、日本文化を代表する都市である京都府や京都市と連携することで、本事業の成果発信を促進する。

以上の自治体や組織等と連携し、ブランディング戦略を推進する。



5. 年次計画（3ページ以内）

2018年度	
目 標	<p>【研究活動】 本事業に関連する学内研究資源の整理・集約、体制整備・組織化および連携機関との調整等による研究活動の基盤を構築する。また、予備的な調査研究の実施および既に着手している研究活動のうち継続・発展させる課題の整理を行う。</p> <p>【ブランディング戦略】 本事業の内容、特色、意義等を本学の将来ビジョンとの関連性のもとで整理し、様々な広報ツールを活用して周知する。また、研究活動と連動した広報体制の整備を行う。</p> <p>【達成度評価の指標】 実施計画に記載した各項目の遂行・実施結果を確認するとともに、「3. ブランディング戦略」の「成果指標と達成目標」に記載した指標・数値目標を用いて進捗状況を把握する。</p>
実施計画	<p>【研究活動とブランディング戦略の関係】 事業初年度であるため、研究活動とブランディング戦略の全事業期間における実施計画を共有した上で、5年間の事業を着実に実施・達成するための体制基盤を構築する。</p> <p>【研究活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内および学外との連携体制の調整・構築。 ・本学所蔵の源氏物語に関連する古典籍（山岸徳平文庫等）の整理・目録化および公開。（次年度以降も継続） ・本学所蔵の古筆切を中心とした古典籍資料（文芸資料研究所所蔵等）の調査研究。（次年度以降も継続） ・東洋文庫、龍谷大学との連携のもと、3Dレーザ顕微鏡を用いた古典籍資料の紙質測定および年代同定の着手。（次年度以降も継続） ・国文学研究資料館、奈良先端科学技術大学院大学と光学分野を応用した古典籍資料の調査研究に向けて協議。 ・韓国で開催される国際ワークショップ（絵入本学会）における学術交流。 ・日本文化の研究拠点が形成されつつある韓国の研究機関（明知大学校、ソウル大学校）との情報交換と共同研究着手。（次年度以降も継続） <p>【ブランディング戦略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学WEBサイト内の特設ページを開設。 ・大学WEBサイト内の受験生向けページに本事業の紹介を掲載、特設ページへのリンク設定。 ・SNSでの情報発信を開始。（次年度以降も継続） ・英語版サイト開設に向けた準備。 ・マスコミ関係者への取材依頼およびプレスリリース実施。（次年度以降も継続） ・グループウェア、学内報等による学内への本事業内容の周知。 ・事業紹介パンフレット（導入版）の制作と配布、特設ページへの掲載。 ・文芸資料研究所紀要『年報』での本事業の紹介および成果発表。（次年度以降も継続） ・オープンキャンパスでの本事業の紹介展示等。（次年度以降も継続） <p>【目標達成度の測定方法】（事業実施期間にわたり毎年同内容で実施） 研究活動の達成状況は文芸資料研究所と研究推進室、ブランディング戦略の達成状況は企画広報部が中心となり、毎年度末に測定と取りまとめを行う。上記実施計画に記載した全事項の遂行状況を確認するとともに、「3. ブランディング戦略」に記載した指標によって定量的に状況の把握を行う。次年度以降も同様に目標達成度の測定を行う。</p>
2019年度	
目 標	<p>【研究活動】 前年度に構築した事業実施基盤のもと、①源氏物語本文の学際的探求、②源氏物語の文化的・社会的研究、③海外との共同研究の3つの柱で研究活動を本格化する。</p> <p>【ブランディング戦略】 研究活動の本格化を受け、その成果をもとにしたシンポジウム、イベント、生涯学習講座等によるブランディング戦略を展開する。また、本学の創立120周年事業と連動した本事業の周知を行い、学内外から更なる認知を得る。</p> <p>【達成度評価の指標】 実施計画に記載した各項目の遂行・実施結果を確認するとともに、「3. ブランディング戦略」の「成果指標と達成目標」に記載した指標・数値目標を用いて進捗状況を把握する。</p>

<p>実施計画</p>	<p>【研究活動とブランディング戦略の関係】 研究活動の本格化に伴うブランディング戦略の展開が必要となる。研究活動の成果を柔軟にブランディング活動へ反映させるため、随時情報の共有を行う。また、120周年記念事業と連動した広報活動を行うため、研究活動の成果のうち視覚的な訴求力に優れる源氏物語の文化的・社会的側面に関する展示等を積極的に行う。</p> <p>【研究活動】 ・源氏物語に関する古典籍資料の調査収集を本格化。特に鎌倉期以前の古筆切資料の発掘。 ・前年度から実施している紙質測定の結果についてデータベース化、公開を進める。 ・光学分野の応用による資料調査研究の開始。（次年度以降も継続） ・源氏物語と有職故実・装束、礼法、香道に関する研究の着手。（次年度以降も継続） ・源氏物語の意匠・文様と後世の受容に関する研究の発展。（次年度以降も継続） ・源氏物語研究の歴史を有するイギリス（大英博物館）、フランス（フランス国立極東学院）との学術交流、共同研究着手。（次年度以降も継続） ・研究成果の学会における発表、論文投稿。例えば本文探求は中古文学会、文化・社会的側面は日本近世文学会等を候補とする。（次年度以降も継続）</p> <p>【ブランディング戦略】 ・国文学研究資料館との連携のもと、本学所蔵資料のオープンデータ化による学術利用促進および研究成果の公表を実施。（次年度以降も継続） ・本学の120周年記念イベントと連動した、キックオフシンポジウムおよび展示の実施。 ・Webサイト特設ページの英語版を公開。 ・大学案内「CAMPUS GUIDE BOOK」での本事業の紹介を開始（次年度以降も継続）。 ・学園祭やホームカミングデーにおいて、本事業の紹介を実施。（次年度以降も継続） ・日本の伝統文化に関する授業における本事業の成果活用（次年度以降も継続） ・本学の東京オリンピック・パラリンピックプロジェクトが主催する企画での成果活用。 ・在学生が集まるスペースでの本事業の紹介展示、および香雪記念資料館における展覧会開催。（次年度以降も継続） ・在学生対象のオリエンテーションにおける本事業紹介。（次年度以降も継続） ・本事業の研究成果を取り入れた生涯学習講座実施。（次年度以降も継続） ・古典の日推進委員会、京都府・京都市との連携による体験型イベントの試験的实施。</p>
<p>2020年度</p>	
<p>目標</p>	<p>【研究活動】 前年度から引き続き研究活動を実施するとともに、成果の蓄積と連携体制の拡充をもとに国際的な研究拠点としての整備を進める。また、中間報告のシンポジウム開催等により当該時点での成果を取りまとめるとともに、全体の進捗確認および計画の調整を行う。</p> <p>【ブランディング戦略】 研究活動の成果をもとにシンポジウム、イベント、生涯学習講座等によるブランディングを展開。また、東京オリンピック・パラリンピックと連動した本事業の紹介等を実施。</p> <p>【達成度評価の指標】 実施計画に記載した各項目の遂行・実施結果を確認するとともに、「3. ブランディング戦略」の「成果指標と達成目標」に記載した指標・数値目標を用いて進捗状況を把握する。</p>
<p>実施計画</p>	<p>【研究活動とブランディング戦略の関係】 中間報告の国際学術シンポジウムを開催し、研究活動の成果が発表される年度であるため、本学の独自性・特色ある研究が明確に伝わることを意図した広報活動を行う。また、東京オリンピック・パラリンピックに伴う外国人訪日客の増加が想定されるため、源氏物語や日本文化の可視化・具現化につながる研究成果を活用した体験型イベントを行う。併せて数値指標をもとにブランディングの進捗評価を行い、結果を研究活動にフィードバックする。</p> <p>【研究活動】 ・当該年度までの成果を取りまとめ、国際学術シンポジウムにおいて中間報告を行うとともに、学術交流により国際研究拠点の形成を促進する。 ・海外研究者と情報交換を行い、次年度の拠点の確立に必要な情報の共有を行う。 ・源氏物語本文の探求と受容に関するワークショップの開催。 ・源氏物語と食文化、民俗芸能との関連についての研究に着手。（次年度以降も継続） ・専門家の協力のもと、源氏物語と中世日本文化の可視化として装束、香道等の再現に着手。 ・日本で開催される国際ワークショップ（絵入本学会）における学術交流。 ・2018年7月時点で現地語による源氏物語の翻訳が存在しないマレーシア（ラーマン大学）との学術交流により、源氏物語の世界文学としての可能性に関する知見を得る。</p> <p>【ブランディング戦略】 ・東京オリンピック・パラリンピックの開催期間に、外国人観光客を中心として、源氏物語と日本文化の体験型のイベントの開催及び展示を実施。 ・事業紹介パンフレット（中間報告版）を作成し、ステークホルダーに配布するとともに特設ページに掲載。 ・成果指標の達成状況の確認・検証、計画の見直しを実施。 ・WEBサイト内特設ページのコンテンツの整理、見直しを実施。</p>

2021年度	
目 標	<p>【研究活動】 前年度に実施した中間報告をもとに、最終年度に向けて研究計画の調整を行うほか、最終的な成果の取りまとめに向けて研究活動を継続する。また、研究資料の拡充と、国際共同研究や学術交流をもとにした研究体制の強化により世界的な研究拠点としての地位を確立する。</p> <p>【ブランディング戦略】 前年度までと同様の広報活動を展開するとともに、前年度に実施した中間報告をもとに、最終年度に向けてブランディング戦略の調整を行う。</p> <p>【達成度評価の指標】 実施計画に記載した各項目の遂行・実施結果を確認するとともに、「3. ブランディング戦略」の「成果指標と達成目標」に記載した指標・数値目標を用いて進捗状況を把握する。</p>
実施計画	<p>【研究活動とブランディング戦略の関係】 当事業における源氏物語研究の成果蓄積と体制整備をもとに、実態として本学の研究拠点化が達成されることを受け、ブランディング戦略としては源氏物語研究の世界的拠点としての位置付けを学内外に対して積極的に広報する。</p> <p>【研究活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究成果の取りまとめと書籍刊行に向けた準備。 ・3Dレーザ顕微鏡の活用や、光学分野の応用による科学的手法に基づいた古典籍資料調査について、調査結果の蓄積をもとに手法として確立するとともに、国内外に成果を発信。 ・収集・発掘した源氏物語研究に関する古筆切の整理と分析により、本文探求の研究を進める。 ・源氏物語が現代の文化・社会に及ぼす影響についての研究に着手。 ・国内外連携機関との学術交流の活性化、源氏物語研究の国際的拠点としての確立。 ・前年度の中間総括と達成状況を踏まえ、最終年度に向けて研究計画の調整を実施。 <p>【ブランディング戦略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・源氏物語研究の世界的拠点としての位置付けについて、Webサイト等を通じて発信。 ・源氏物語や日本文化の可視化・具現化を目的として再現された装束等を活用したイベントの企画・開催、オープンキャンパス等での情報発信。（次年度以降も継続）。 ・前年度の中間総括と達成状況を踏まえ、最終年度に向けて戦略の調整および達成目標の見直しを実施。
2022年度	
目 標	<p>【研究活動】 研究成果の取りまとめと発信を重点的に実施。また、研究活動の進捗を確認するとともに、次年度以降も研究拠点として継続的に活動するための体制整備及び計画の策定を行う。</p> <p>【ブランディング戦略】 5年間の事業の振り返りを行い、総括の上で学際的・国際的なシンポジウムを開催する。本事業の実績、研究成果について、様々な広報ツールを活用して周知する。また、達成度評価を行い、事業終了後のブランディング戦略を策定。</p> <p>【達成度評価の指標】 実施計画に記載した各項目の遂行・実施結果を確認する。また、全てのステークホルダーについて、本学のイメージが浸透したのかどうか、「3. ブランディング戦略」に示した指標によって把握する。</p>
実施計画	<p>【研究活動とブランディング戦略の関係】 5年間の事業の総括を行うとともに、継続に向けた実施体制の構築、戦略の策定を行う。研究活動の成果を様々な広報ツールで発信し、本学のブランディングを確立する。</p> <p>【研究活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究成果をまとめた書籍を刊行する。 ・本事業の最終的な成果報告のため国際的なシンポジウムを開催。 ・国際ワークショップ（絵入本学会）における学術交流。 ・本事業の終了後の研究の継続的な実施に向けて、計画の策定を行う。 ・策定した計画を踏まえ、研究実施体制の見直しを行う。 <p>【ブランディング戦略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際的なシンポジウムと連動し、全てのステークホルダーを対象とした体験型イベント、事業の紹介等を行う。 ・研究成果、本事業の実績をとりまとめ、特設ページにおいて広報する。 ・事業紹介パンフレット（最終報告版）を作成し、ステークホルダーに配布するとともに特設ページに掲載する。 ・グループウェア、学内報等によって、本事業の成果を学内に周知する。 ・全ての成果指標の達成状況の確認と検証を行い、事業終了後のブランディング戦略を策定。

**6. 「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」との関連
(該当する場合のみ：1ページ以内)**

該当なし。